

アイルランド・日本交流美術展 「怪談—ラフカディオ・ハーンとの邂逅」

〈小泉 凡〉

ラフカディオ・ハーンが「ハーンとの邂逅」。ハーンが173回目の誕生日を迎え、晩年の代表作『怪談』に因って6月27日、小泉八雲記念館では新しい企画展がスタートした。タイトルはアイルランド・日本交流美術展「怪談—ラフカディオ・ハーンとの邂逅」。

40点を制作した。

アイルランド人アーティストのステイブ・ローラーとエド・ミリアーノ、ケイト・マクドナーが中心となり「ブルー・ムーン・プロジェクト」を結成。日愛40人のアーティストが参加し、3年がかりで展示会が実現した。趣旨はハーン

という人物や作品の魅力を生かしている。神秘体験がアートや文学の表現に与える影響力がシンクロする。たとえばステイブ・ローラーが2カ月を費やして制作したエッチング作品「お女中(むじな)」は、自身がスウェーデンのマナーハウスでみた幽霊が原像になったという。実はハーンも

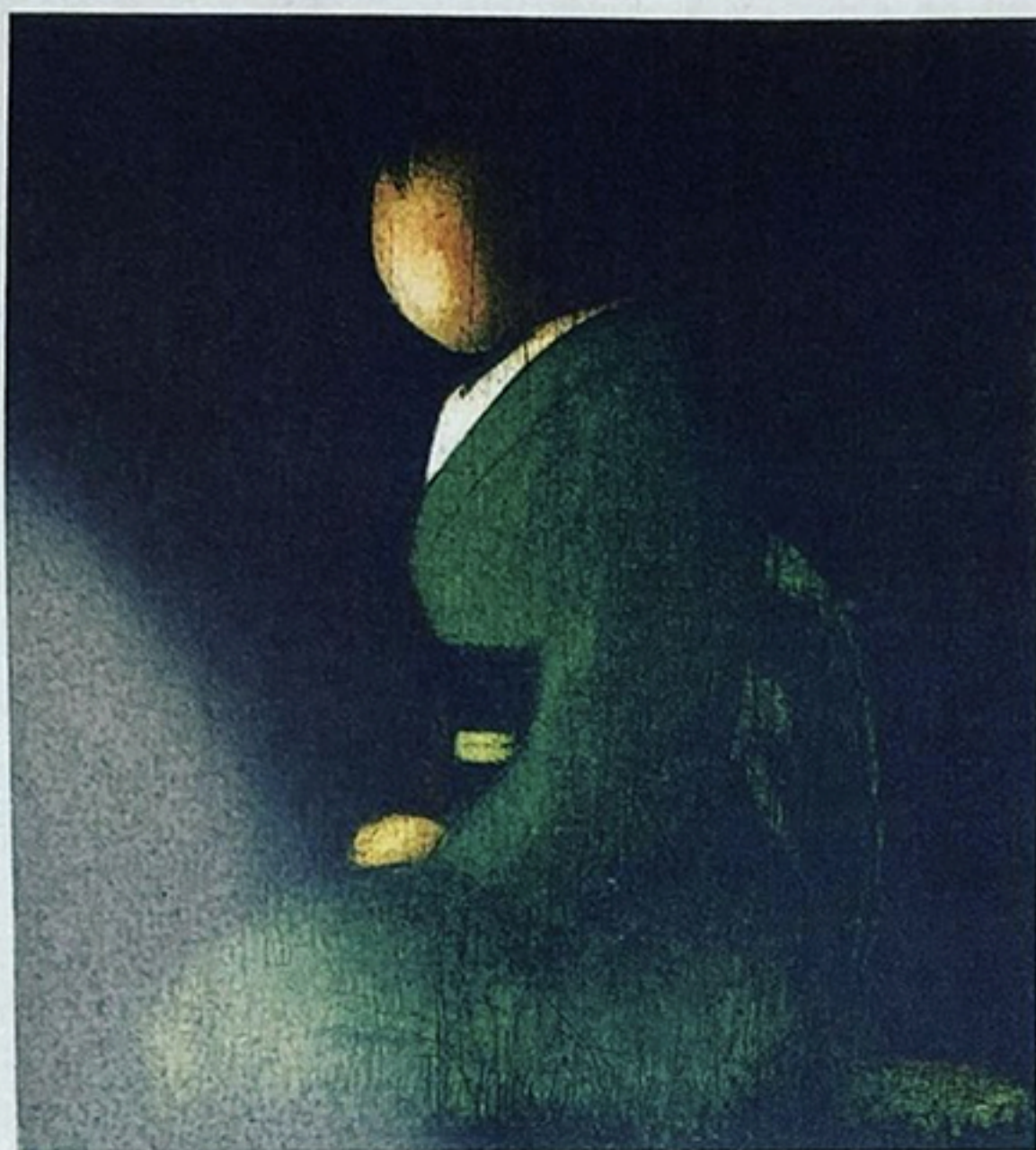
体験を「むじな」の再話に生かしている。神秘体験がアートや文学の表現に与える影響力がシンクロする。概して、「むじな」「雪な木とみなすケルトの樹霊信仰が根づいている。ハーンも幼い頃、アイルランドで乳母キヤサリンの語る妖精譚に魅了されたのが怪談への関心のきっかけとなっ

両国の文化交流深化に期待

ダブリンの家で、のっぺらが、両国の基層文化の共通性を垣間見ることができた。

また、アイルランド人の作品に「蓬菜」をテーマとする作品が複数みられる。そこには、ケルトの異郷テイル・ナ・ノグ(常若の楽園)との関係性が浮かび上がる。「両国の民俗には、生者と死者に関する重要な類似性がある」と、プロジェクト代表のステイブ・アイルランド」と「ゴーストリー・トリイ・ジャパン」の親和性を感じるの、ハーンと現代のアーティストの共通した感性といえるのかもしれない。

今回の企画展は、小泉八雲記念館の発案ではなく、アイルランドのアーティストたちの持ち込み企画。その中、



ステイブ・ローラー作「お女中(むじな)」



企画展の開幕セレモニーに出席したアイルランドと日本の作家たち。後列右から4人目はデミアン・コール駐日アイルランド大使—松江市奥谷町、小泉八雲記念館